水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

1	コスモスや日に七本のローカル線	ローカル線に寄り添うコスモスの優しさが伝わる。日に七本しかない寂しさとコスモスの華やかではない清楚さがあっている。ローカル線で旅をしたくなりました。今日もコスモス畑を過り行く一両電車。田舎ならではの風景が立ち上がってくる。日本の原風景を想わせる。そして、そこに自分がいる。青く澄み切った秋空の下、人家もまれな土地に線路（単線だろう）が通っている。線路脇には可憐なコスモスが続いている。やや作為が感じられるものの、景が懐かしく好ましい。	檜鼻ことは
	のり子　風舎 小麦 みずほ 六弦 俳爺 寒立馬		
2	ラフランス上手に剥いて嫁に行く	嫁入り前の心境がラフランスを丁寧に剥く手先に読み取れる。瓢箪型のラフランスが上手に剥けれは嫁さん合格。類想あるかもわからないが、ラフランスを持ってきたところが上手い。昭和の映画の様です。完熟のラフランスは柔らかで剥きにくいもの、これが出来れば花嫁修業卒業。ラフランスが剥ける新妻か。もういちど結婚してもいいか。嫁ぐ女性の気持ちが感じられる	新井のり子
	荒一葉　絵無 暦文 凡士 月を きいち 山菜		
3	銘柄は彼女の推しで新酒酌む		森　佳月
4	雁わたる予約電話に訛りかな		小川夏霖
5	逆行のできぬ人生うそ寒し		西村英文
6	片雲の縷々とかかりて月今宵	平安朝　光源氏が見た中秋の名月を連想　美しいです。	しんい
	喜夫		
7	ただ聞いてやるだけ梨を剥いてゐる	母親の子どもへの思いが表現され、「梨を．．．」が強調している。聞き上手な人の手先の梨に視線が集まる。親子か夫婦かまたは…色々と気になる一句です。	荒一葉
	朝香 稀香 六弦		
8	山門を潜り感じる秋の風		衛
9	体育日鴨居に少しぶら下がり	身体を動かさずにはいられない心境を良く言い表している。	幸子
	きいち		
10	モンローのスカートふはり遠案山子	案山子とモンローの取り合わせが面白い、こんな案山子見てみたい。田んぼの案山子がマリリン・モンローだったなら、さぞ鳥さんはびっくりしたろうなあ。白いスカートがめくり上がって。	網野月を
	稀香 山菜		
11	日の深く射して五箇山冬支度	冬の美しい景さえ思い起させる季語が効果的です。	河野凡士
	京子		
12	十三夜見渡すかぎり田は静か	実り豊かな秋を感じさせる句です。遠目が効く月明りに浮かぶ田んぼ、郷愁そのものだ。	しーしー
	音思 寒立馬		
13	団栗やお化け屋敷を木の間越し		本橋稀香
14	月落つや妙義の山の鷹戻し		光雲2
15	胸中のつかえ晴れたる良夜かな		新暦文

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

16	京子 絵無	鉄条網抜けて顔だすゴーヤかな	沖縄基地に対するユーモア句。ゴーヤの根は内側、作者は外側。ゴーヤの生命力の強さが現れている。	秋谷風舎
17		丸善に檸檬しかけて稲びかり		森下山菜
18	佳月	好きなるが故の意地悪白木槿	妻もそうでした。	青木鶴城
19	道を	赤とんぼ空に隠り沼夕映ゆる	「空に隠り沼」の措辞良いですね。	高原ひろし
20	暦文 鶴城	厳格な父秋晴の七回忌	厳格な父には秋の青空が似合う。秋晴れが効果的。	石関六弦
21		老農夫笑みで皺曲げ新酒愛づ		小林土璃
22		割り切れず一夜一夜に紺の秋		絵無
23	土璃	濃きもののすべて溶け去り秋の水	「濃きもの」の暗示が効いていて、清涼感が際立っていると思います。	みづる
24	しんい しーしー	天平の甍艶やか秋時雨	格調高くして正統である。千年の時間も感じます。	渋谷きいち
25		そそくさと孤影過りて穴惑		反町修
26		十キロ走五分縮めし秋の風		龍野ひろし
27	鶴城	松手入鋏を止むる宅配便	宅配が届くとき今までの音と動きがピタリと止む。	俳爺
28		描き飽ひてペン回しをり居待月		後記朝香
29	喜夫	からたちの実更地になりし故郷よ	からたちの実が無くなった年月を思い出させ、昭和も遠くなりにけり、少し寂しいですけど、郷愁の句いいですね。	和田イチ子
30	しーしー 風舎 かげろう	日本橋潜るクルーズ天高し	橋を見る視点とその先の天との取り合わせ。「日本橋」を渡るのではなく、「潜る」と詠んだ。クルーズ船からは、「日本橋」越しの天高い秋空を詠んだ。逆転の発想と立体的な景が佳い。季語が立っていて下から見上げる日本橋が斬新。	丸山マスミ

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

31	文麦 小麦 修 朝香	豪快に笑ひて垂るる石榴の実 真っ赤な口を開けて笑うが如き石榴、まさに豪快。柘榴の実を豪快に笑っているとの表現がなるほどと感じた。擬人化が効いている。「豪快に笑ひて」がユーモアがあり、いかにも石榴らしい。	後藤允孝
32		巨星墜つ消えゆく人や秋淋し	木村小麦
33	ひろし 青夏 しんい	玉砕は美学にあらず草の花 季語の草の花が絶妙。	染谷風子
34	かげろう	朝日射す方より紅葉染まりゆく 朝の紅葉がうまく表現されている。	倉田詩子
35	佳月	大根も豆腐も白し寒露かな	霜里
36	俳爺 絵無	秋時雨火葬場に立つ煙あり また、誰かが荼毘に。秋時雨がいっそう寂寥感を掻き立てる。故人をしのぶ気持ちが込められている。	かげろう
37		遥けきやゆるい登りの野路の秋	寒立馬
38	ひろし　俳爺 荒一葉 のり子 しーしー 月を 風子	くちびるに一瞬の隙星の恋 嫁入り前の心境がラフランスを丁寧に剥く手先に読み取れる。直球の恋の句が新鮮。景が浮かびませんが、良い？好き！。遠い昔にこういう事があったかどうか、忘れてしまいました。七夕の夜の一瞬の出来事、作者の喜びが伝わってくる。一瞬の隙から生まれた星空の下の恋。思いがけなくくちびるを奪われた（奪った）作者の動揺も見える。	日髙道を
39	夏 允孝 小麦 京子 鶴城	吾亦紅父より少し生かされて お父さんの年齢を越されましたか。天国で喜んでると思います。亡くなった父の年齢を越えたことの感慨と吾亦紅の質素さの組み合わせが良い。しみじみとした感じが出ています。作者と全く同じ思いです。	持永喜夫
40		かまぶろの外はまばゆし紅葉川	中西みずほ
41	ことは	産地から新酒出揃ふ物産展 肴もついでに、楽しい物産展です。	小林京子
42	マスミ	風の盆うしろより来て三味の鳴く 「風の盆」は、風の神を鎮め、豊作を祈る行事。静かで物悲しい曲に乗って踊る心深い踊りがゆかしい。「三味の鳴く」が良い。	新井のり子
43	霜里	六地蔵六つのコップに秋の水 六体並んでお揃いの光景が微笑ましい。	森佳月
44		昼四つの鐘を聞く道葛の花	檜鼻ことは
45	修 道を	賜りし命の色や柿紅葉 柿紅葉を命の色としたのが上手い。「柿紅葉」の季語が効いてきます。	西村英文

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

46	土璃 允孝	稲雀トルネードにもすぐ慣れて	「すぐ慣れて」の措辞で、にぎやかな雀の様子が浮かび上がっていると思います。	しんい
47		落雷を視る百人の気配かな		小川夏霖
48	喜夫	湯治場の夜更けの湯浴み虫時雨	虫の鳴き声を聞きながら入る露天風呂行きたくなりますね、一人静かに人生の余韻を楽しむ、いいですね	衛
49	荒一葉 音思 月を マスミ	コスモスを離れぬ風や河川敷	上五中七の措辞が的確。コスモスの花が揺れやまずにいる様が目に浮かびます。世間は無風でも川風は未だ止まず、でしょうか。河川敷にコスモスが揺れている。川風は静かながらやむことはない。「コスモスを離れぬ風」が良い。	幸子
50	朝香 六弦 みづる	ひと言にひと言あとは虫の闇	老夫婦の会話が想像され、座五が効いている。あまり多くを語らぬ秋の夜長ですね。虫の声と二人の言葉少なさが静寂と夕闇の暗さを一層引き立て、趣がある。	荒一葉
51	青夏 風舎 かげろう	追ひ越してまた吾を待つや銀やんま	「銀やんま」を主語として、作者の周りを飛ぶ姿を詠んだ。心優しい作者の姿が浮かんでくる。中村汀女句を超えたか。いくらか飛んではホバリングする銀やんまの擬人化がうまい。	河野凡士
52		前栽の食用菊のうね黄花		しーしー
53		富士山は雲の向かうに案山子雨		網野月を
54		五秒後の未来描けず紋蜉蝣		光雲2
55	ひろし きいち	決めかねて未だコスモスの風の中	決断に揺れる気持ちが風の中のコスモスでうまく言い得てる。	新暦文
56	しんい	曼珠沙華八百屋お七の恋の火の	倒置法を用いた句形に共感。	本橋稀香
57	風子	行く秋のギャバンに灯るゴロワーズ	映画のシーンのゴロワーズを吸うジャン・ギャバンに作者は過ぎゆく秋を惜しんでおり、句材が新鮮。	森下山菜
58	土璃	園児らの窓にさよなら秋の蝶	句全体が醸す、何とも言えない秋の裏寂しさに魅かれました。	高原ひろし
59		長岡京といへば道真竹の春		秋谷風舎
60	音思	中庭の内緒話や虫の夜	人に知られたくない話をしている雰囲気が感じられます。	石関六弦

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

61	ことは 修 みずほ 霜里 寒立馬	大江戸の古地図散歩や秋高し	地名を辿りながら、楽しい散歩ですね。晴れ渡った秋空の下古地図を頼りに旧江戸の街の散歩は楽しい。大江戸の古地図を持って、お江戸情緒を散策する日。単なるウォーキングでないところが、面白いです。町歩きには良い時候となりました。シニアの歴史散歩か、溌溂として高齢者群が闊歩する。	青木鶴城
62	凡士 稀香	逃げろ！逃げろ！追われる鰯マスゲーム	逃げる大群の鰯のうねりをマスゲームと比喩したところが面白い。鰯の群れがいろいろな陣形で敵から身を守っているマスゲームが上手い。	絵無
63		新秋の苔にふかぶか指沈め		みづる
64	みづる	新酒受くやつと出番の江戸切子	とっておきのお気に入り、或いは初使いの盃をやっと手にするワクワク感、新酒の味わいも格別な事だろう。	小林土璃
65		掴み取り浅瀬を泳ぐ秋の鮎		反町修
66	允孝	秋の暮影の淋しき滑り台	秋の太陽は釣瓶落としのように早いです。その分暮れれば非常に寂しさを関います。	龍野ひろし
67		月光菩薩の秋思ハロウィーン		渋谷きいち
68		赤き実のつやめき落ちぬ露時雨		後記朝香
69		へばりつく蔦主帰る家灯る	「漂泊の思ひ」に突き動かされて、後半生を旅に過ごした翁。そう言えば今日は「翁の忌」庭に来ている鳥も「過客」なのであろうか。	和田イチ子
70	マスミ	庭に来る鳥は過客や翁の忌		俳爺
71	凡士 みずほ 霜里	木の実降る片言増えし一歳児	1歳児からは、それこそ木の実降る如く語彙が増えていく。木の実が熟して落ちる秋に、すくすくと育つ幼子のようす。生命の力が伝わってきますし、可愛らしさに溢れています。どんぐり拾ってキリも無し。	後藤允孝
72	月 佳風子	弁解は簡潔が良し秋の雲	秋の澄んだ空の白雲の如く弁解は簡潔明瞭が一番。	木村小麦
73		山霊の祠に多（さは）に野辺の菊		丸山マスミ
74		急ぎの歩止める露草藍深き		倉田詩子
75	允孝	体重計に罪はなけれど秋深し	食欲の秋は何を食べても美味しく体が太ります。本当に体重計には罪はございません。この俳句は大変面白いです。	霜里

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十月

76	山菜	凶作の村を女衒の黒鞄 女衒が俳句になるなんて。今もいるのかなあ。	染谷風子
77		さわさわと波さびしげに秋の声	寒立馬
78	のり子	松茸狩だれにも言わず入る山 松茸狩の背景にあるものは詠み手次第。	かげろう
79		紅をさす頬の張りさへ肌寒し	持永喜夫
80		回らない回転木馬そぞろ寒	日髙道を
81	ことはみづる	直線の秋刀魚切る時直角に ひと息で引き切りにして、楽しみなことです。包丁を使う角度はなべて直角とはいえ、細長く一直線な秋刀魚だからこその実感。	小林京子
82	道を	大原女の連れ立ちてゆく紅葉山 晩秋の景色を上手に詠まれています。	中西みずほ